

# 民俗博物館だより

Vol.33 No.1

2006. 11. 10



鍛冶屋 (桜井市大泉)

## 目 次

### 特別展特集

〈寄稿〉 鍛冶屋の火が消えた —奈良県吉野郡吉野町阪本鉄工所の調査記録—	角南聡一郎	1
特別展紹介 暮らしを支えた手わざ—鍛冶屋・檜木屋—	大宮 守人	4
奈良県内の畜力用除草機	岩宮 隆司	5
季節とたべもの ドヤモチ・コゴメモチ	横山 浩子	6
民俗公園だより 民俗公園のあらまし	川瀬 浩	7

## 鍛冶屋の火が消えた

—奈良県吉野郡吉野町 阪本鉄工所の調査記録—

(財)元興寺文化財研究所 角南聡一郎

現在、筆者の所属する(財)元興寺文化財研究所は、国土交通省の依頼で、吉野郡川上村教育委員会とともに、川上村白屋地区の総合調査を実施している。筆者は調査地で使用されていた農耕具、山関係道具は、吉野町で購入しているという話を聞き、その鍛冶屋を紹介していただき、関連調査を実施することができた。

伺ったのは、吉野町矢治の阪本鉄工所である。聞き取りは、2004年11月12日、2004年12月27日、2005年1月14日、2005年3月29日の計4回実施した。残念なことに2004年度限りで廃業されるということであったが、「もう廃業するから」ということで色々詳しくお話を聞かせていただくことができた。作業場が無くなるということで、実測作業も実施し平面図を作成し記録した(図1)。

製作工程はⅠ. 熱間工程 1 刃金(鋼)付け→2 先付け→3 焼きなまし Ⅱ. 冷間工程 1 荒切り→2 裏すき→3 ならし→4 毛描き→5 すり廻し Ⅲ. 熱処理 1 焼き入れ→2 焼きもどし Ⅳ. 仕上げ 1 歪み取り→2 研き上げ→3 柄付 という一般的な流れとほぼ同

様であった(写真①~⑦)。ここでは伺った話の中で、阪本鉄工所の特色と考えられる事項を中心に報告をおこなってみたい。

鉄工所は夫婦だけで作業されていた。阪本正治さん(昭和6年4月26日生まれ)、妻・カメノさん(昭和4年11月25日生まれ)である。正治さんの家は、代々鍛冶屋を営んでおり、正治さんで三代目である。祖父・音二郎さんの代に鍛冶屋をはじめたという。父・彦平(ひこべえ)さん(昭和42年没)は二代目であった。祖父は、吉野町檜尾在住の峠さんという鍛冶職人に技術を学び独立した。カメノさんの話では、同町植井で鍛冶屋を営んでいた中村さんの墓は檜尾にあり、この家も峠さんのところで修行したのではないかとのことであった。

正治さんは、もともと吉野高校で設計を学んだが、病気の後遺症によって16歳で耳を悪くされたため、4年間京都市内で働いた後、20歳で家業を継いだ。以来、53年間鍛冶屋を続けてきた。

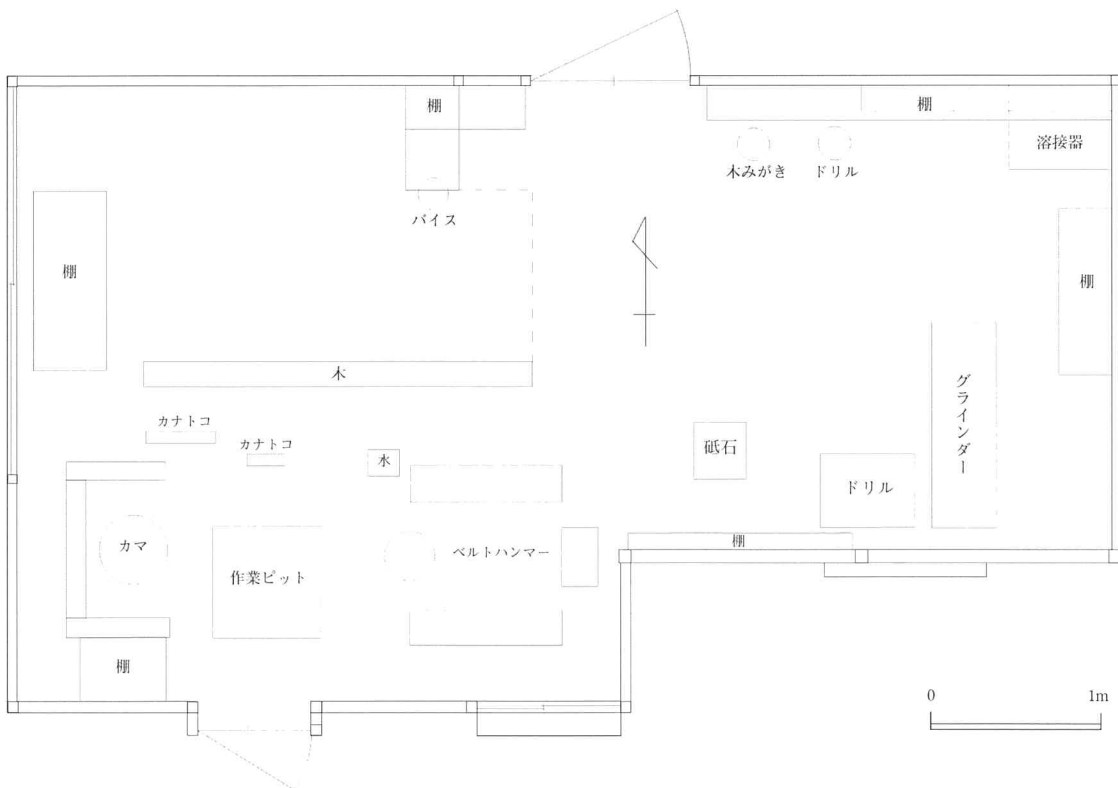


図1 阪本鉄工所平面図

向こう鍮は、祖父の代では夫婦ではなく、彦平さんが行っていた。父の代は当初彦平さんの妻であったが、後年は正治さんになった。普通、鍛冶屋職人として一人前になるには、8年以上かかり、他の職種の職人と比べてずっと時間がかかる。

店先のショウウィンドー内に商品が展示してあり、客はそれを購入する。以前は店に卸していたこともあったという。しかし圧倒的に多いのは、このようなものを作って欲しいというメモ、見本の持参などがあり、

◆鎌の製作工程 (写真①～⑦)



④グラインダーによる整形



①鍮による成形



⑤荒砥による整形



②向こう鍮



⑥焼入れ



③ベルトハンマーによる成形



⑦砥石による仕上げ

それらの要望に答えて製作する注文販売である。注文販売の場合は、個々人の体格や必要に応じて、融通が利き使用者にとっては使いやすい道具を得ることになり、実に合理的な方法である。昔は吉野東部の各地からの注文があった。近年はホームセンターなどで安価な道具が売られるようになり、注文も減ったが、阪本さんの製品は壊れにくく長持ちするという常連客があり、一定数の注文や修理の仕事がある。例えば、除草具のイッポンコリは1500円、ニホンコは1300円、カマクワは1500円といったように、全て手作りである分、多少高めの価格である。しかし、この値段であっても実質的にはほとんど儲けにはならないという。ツルトンカチ、カワムキガマ、カワムキセンなど道具の名称については、阪本さんが自ら名付けることは特になく、注文者・使用者が命名しているようだ。

それまで使用していたコークスが尽きてしまって、もう廃業するので、現在は以前に使用していた松の炭を使用して火をおこして間に合わせている。

向こう鉋の際に、正治さんがもう充分だとカメノさんに合図する方法は、金床の端を叩くことである(写真②)。「阿吽の呼吸」のごとく、夫妻のコンビネーションは素晴らしいものであった。

トンガ(唐鋏)、ヨキ、カマの製作工程を見学することができた。トンガは、ハ(刃)とヒツ(櫃)から構成される。それぞれを別途製作した後に、「クスリ」(ホウ酸に鉄屑などを混ぜたものという。自家製で調合方法などは秘伝とされて口伝である。)をまぶして接合する。ヒツの大きさは、型(鉄製)を用いて確認していく。

焼入れは水焼きではなく油焼きである。使用する油の調合は自家製で、少なくなれば付け足していくものである。焼入れの具合で道具の良し悪しも決まるので、油はとても重要である(写真⑥)。この作業はたとえ弟子であっても一人前になるまでは関わらせてもらえな



写真⑧ 柄付のための割付

かった秘中の秘の作業であるという。鉄の部分は自ら製作するが、柄は名張の木工所から既製品を購入していた。4mmのドリルで穿孔し釘を用いて両者を固定する。近年、その木工所が廃業することとなり、柄を150万円分購入した。現在はそのストックを用いている。釘の位置はヤスリを用いて割付け線を引く(写真⑧)。柄は調整のため一部削ったりする。

廃業の理由は三つある。一つは後継者の問題。阪本さんの息子さんたちは、全て町外に出ており鍛冶屋にはなっていない。第二には、阪本さん自身の年齢と体力。本人はまだまだやれると自負しているが、あと何年できるかはわからない。夫婦の話では、お得意さんに惜しまれながらやめるほうがいいのではないかとい



阪本正治さん(左)とカメノさん(右)

うことになった。第三には町が推進する下水道整備のために、貯水槽を埋設する必要が生じ作業場のスペースを転用する必要が生じた。惜しまれつつも、2005年3月末をもって阪本鉄工所は廃業した。一昔前までは、吉野林業で用いられる道具は、阪本さんのような村の鍛冶屋によって製造されていたのだ。阪本さんご夫妻のご厚意により、聞き取りと作図により、記録が残せたことはせめてもの救いである。

最後に、長々と聞き取りなどにご協力いただいたご両人、この場に報告の機会を与えていただいた、奈良県立民俗博物館・森本仙介氏に深く感謝する。なお、本調査の実施及び本文の作成にあつては、奈良大学文化財学科学学生、加来幹拓、栗田裕美両氏の援助があつた。記して感謝したい。

註1 共通名称は不明である。雁爪(がんづめ)、中国では簞子と呼ばれる類の除草具の改良品であると考えられる。

【参考文献】

- ・大谷大学民俗学研究会編『紀伊熊野市の民俗』熊野市教育委員会 1982
- ・沖川吉弘「根浮かし鋏」『現代農業』84-12 (社)農山漁村文化協会 p81-82 2005
- ・加藤幸治『紀州・移動する職人たち』和歌山県立紀伊風土記の丘 2003

◆ 特別展紹介 ◆

くらしを支えた手わざ

かじや かたぎや  
— 鍛冶屋・榎木屋 —

大宮守人

昨今、村や町の一角で、鍛冶屋の鈍音や榎木屋の柄を削る音は殆ど絶えたといつてよい。昭和30～40年代にはまだ、農具や山の仕事用具など地域の生業に必要な道具を作り続ける職人の姿を見かけることもあったが、コンバインや草刈り機、チェーンソーなどの農機具、山林作業機器など電動具の普及で職域が狭まり、大型量販店の進出が追い打ちをかけた。

彼らの仕事は、注文対面販売という伝統的な形態で、量産には不向きな生産方法ながら、品質においては製作者と使用者の濃密な交流の中で作り改良され、使用者の納得を得る製品に仕上げることができたのである。

かつての小学生は、誰から強要されるのでもなく、道草をくいながら、自然に物づくりの光景を目にし、これを観察することから、今日では得難い感性を養うことができた。手作りで加工され、仕上がっていく光景は、子供の目には、何度みても不思議な、そして新鮮な印象を与えたはずであり、飽きることなく眺めるうちに、ものを知るための基礎教養が養われていたのである。生活の場が、いきおい物作りの現場から分離しつつある今日、一昔前の鍛冶屋と榎木屋の道具や製品を通して、物づくりの原点に立ち返ってみたい。

【展示の概要】

I. 鍛冶屋の製品・仕事場・道具

地域の生業と密接な繋がりを持つ鍛冶屋の仕事では、自ずとそれぞれの手がける製品に違いがあった。奈良盆地では主にヒラグワ、ピッチュウ、トンガなどの鋏類や、除草具、脱穀用具などの農具を手がけるノカジ（農鍛冶）が、また林業の盛んな県南部の吉野一帯では山林用具、木材加工用の様々な刃物の需要が多く、ハモノカジ（刃物鍛冶）が多くみられた。林業用具のうち、ノコギリや大型のヨキ類、ナタガマ、ツルなどは県外のもが多くを占めていたものの、樽や桶、杓子、曲物、箸など林産加工品を製造するセンやヤリガンナ、ホウチョウなど、独特の刃物類は、殆ど地元の鍛冶屋が注文に応じてを手がけたものであった。

鉄を熱し、素早く打ち延ばす、またこれを水に入れて急激に冷やす、など一連の作業を、鉄の顔色（色の変化）を見極め、瞬時の判断の下に行わなければなら

ない。そのため、ヨコザとよばれる親方の立ち位置を中心に、全ての設備、道具が手の届く範囲に合理的に配置されている。鉄の色、火の色が重要な勘どころとなるため、仕事場は日中も薄暗い。

道具は、火をおこすもの、鉄を打つもの、鉄を削るものに大別される。鍛冶屋の象徴でもあるフィゴ、鉄を打つためのツチ（鈍）、ムコウツチ（向鈍）などの金鈍類、鉄の切断や穿孔用のタガネ類、カナトコ、トウリクチなど打ち台、熱した鉄をはさむ大小様々なヤットコ、仕上げの整形に使われるコウスキや刃物研ぎ道具など。西洋式の道具や電動具なども取り入れながら受け継がれてきた鍛冶屋の道具を紹介する。

II. 榎木屋の製品・道具

榎木屋は、道具の木の部分を作る職人で、榎の木に代表される堅く頑丈な木で作ることからの呼称である。「平屋」「棒屋」「枋屋」など他にも様々な呼び方があったことからわかるように、その手がけるものは農耕用具、山林用具、土木作業用具など実に広範囲にわたったが、その中心となるのはやはり農具であった。

クワやスキの大きさや柄の角度などは、使う場所の土質やその地域の習慣の違いに大きく左右される。こうしたことを熟知した人でなければよい製品は作れなかった。

榎木屋の道具は、道具の柄など材を円柱状の棒に削り出すこと、また堅い木を加工する点に特色がある。

製品の種類や整形の過程によって細かく使い分けられるカンナをはじめ、ノミ、キリ、ヤリガンナなど夥しい数の道具が作業場に並ぶ様子は壮観である。縦挽のこぎり鋸や電動工具の普及による材の取り方など、榎木屋の作業も時代によって変遷があるが、重要な道具の柄などに、割木工の基本が踏襲されている点は興味深い。



修理を待つ農具（桜井市大泉 藤田鍛冶店）

## 奈良県内の畜力用除草機

岩宮隆司

当館には、畜力用除草機が2点収蔵されている(図表①、写真①)<sup>1</sup>。除草機とは、夏に水田の中耕除草を行う農具である<sup>2</sup>。除草機の前につながれた牛や馬が歩くと、除草機の歯車が回転して雑草を倒すと共に、土をかき混ぜる仕組みになっていた(写真②)。歯車が回転する畜力用除草機には4種類があり、それぞれに対応した田植え方法があった(図表②)。除草機は、第I類から第II類、A型からB型、田植えは、寄せ畦植えから並木植えに発展していったと考えられている<sup>3</sup>。

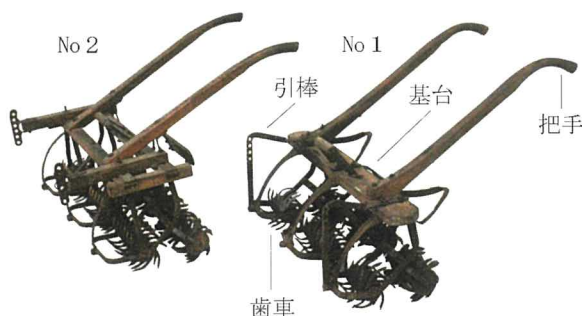
No	収集地	長	幅	高	形態分類	登録番号
1	生駒郡安堵町西安堵	1080	870	750	第I類	9904627
2	宇陀市大宇陀区	970	940	740	第II類	2000017

▲図表① 畜力用除草機の収集一覧

型 式	前列の歯車	後列の歯車	田植え方法
第I類	A型 中央は幅が広い	前列と同じ形	寄せ畦植え
	B型 左右は幅が狭い	内向対象の2つ	
第II類	A型 全ての幅が同じ	前列と同じ形	並木植え
	B型	内向対象の2つ	

▲図表② 畜力用除草機の形態分類

No2は、昭和47年(1972)に、現在の宇陀市大宇陀区から収集したものである。寄贈者が不明で、追跡調査が出来ないので、No2に関する情報は、収集した時に記した台帳しかない。そこには、収集地における呼び方として「田かじき」、使用方法として「牛に引かせて田の中耕及び除草をなす」と記されている。それに対して、No1は、昭和63年に、生駒郡安堵町西安堵から収集したものである。No1の使用者は死去されていたので、その子息に追跡調査を行った<sup>4</sup>。それによれば、(A)昭和43年には、No1を使っていなかった、(B)農業好きの子息は、No1の使用者であった祖父から使用方法を聞いた、(C)牛好きの祖父は、当家で1年中飼っていた牡牛を使いこなすことを誇りにしていた、(D)当家では、男手がなく、機械好きの祖父が1人で農作業を行



写真① 当館所蔵の畜力用除草機

っていた、ことが分かった。

このことから、畜力用除草機は、働き手が少なく、力のある牡牛を飼っていた家で使われていた可能性がある。

しかし、(a)約

30年間、同じ種類の農具であっても、収集してきた当館において、人力用の除草機が50点以上もあるのに、畜力用は2点しかないこと、(b)これまでの聞き取り調査では、畜力用除草機を見た人がいないこと<sup>5</sup>、(c)重さ約20kgの畜力用除草機を動かし、除草機に対応した田植えを行うには、牛や作業者の負担が大ききこと、(d)畜力用除草機の登場後、間もなく除草剤の散布が始まったことから、奈良県内の畜力用除草機は、農具の利便性や必要性よりも、牛を利用した農作業や最新の農具が好きな家で使われ始めた可能性が高く、あまり普及しなかったのではなからうか。

皆様からいろいろな情報を頂ければ幸いです。

註1 図表①の「長・幅・高」は、「引棒から把手の両端・基台の両端・地面から把手まで」の測定値(単位はmm)、「登録番号」は、当館の収蔵番号である。No1とNo2は、基台の上に「専売特許高北式 畜力除草機」と「□□□□ (商) 高北式□□ □ □ 除草機」と印字されている。

2 中耕除草とは、作物の生育を良くするために、根ぎわを浅く耕すことである。

3 農林水産技術会議事務局『写真でみる農具民具』(農林統計協会、1988年)100頁。人力から畜力による中耕除草にすると、牛が通れる様に畦の幅を広げ、牛が通る所を想定して田植えを行う必要があった。しかし、これでは牛の通路に苗が植えられないので、収穫量が減ってしまう。そこで工夫されたのが、牛が通過する畦の幅を広げ、その分、畦を左右に移動させた「寄せ畦植え」である。しかし、これでは、田植えが繁雑になってしまう。そこで、工夫されたのが、牛が通れる様に全ての畦の幅を広げて、その分、苗の幅を縮めた「並木植え」である。

第II類は、三つの歯車が同じ幅であるが、第I類は、牛の通路に当たる歯車が狭くなっている。B型は、A型に比べて土の攪拌性や反転性に優れている。

4 平成18年(2006)6月23日、9月28日、10月31日に、聞き取り調査を行うと共に、本稿の読み合わせを行い、誤認をなくした。祖父(明治25年[1892]誕生、昭和60年死去)と子息(昭和15年誕生)は共に専業農家であり、牛を飼っていた頃には、自宅の周辺に約3町を所有していた。

5 平成15年7月1日から同18年9月30日までに、農作業に牛を使っていた約40名に、奈良県内の全域で聞き取り調査を行った。それによれば、①大部分の家では、牡牛は気性が荒くて怖いので、牝牛を飼っていた、②牛の利用は、主に農作業だけであったのに、牡牛を飼っていた人は、「牛や最新の農具が好き」「牡牛を所有していることを誇りにしていた」という傾向がある、ことが分かった。



写真② 畜力用除草機を使用した作業風景  
場所：埼玉県鴻巣市(註3の参考文献より引用)

## 季節とたべもの ドヤモチ・コゴメモチ

横山浩子

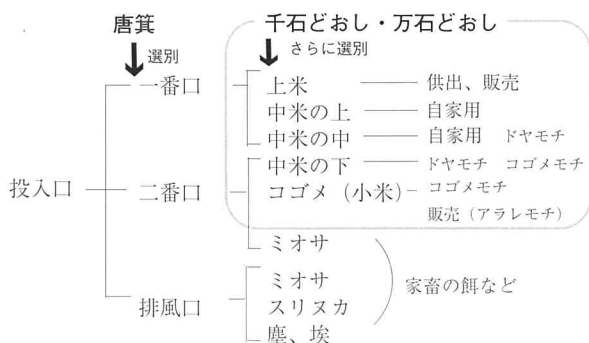
ここに紹介するのは、平成17年10月12日、大和郡山市小泉在住の、山口幸雄氏（昭和5年11月生れ）よりお聞きした話である。

戦前の小泉周辺の秋の収穫は今より遅く、10月下旬頃だった。稲刈りに始まりハサかけ、稲こき、カド干し、籾摺り、米の分別に至る一連の作業を12月中旬のおん祭り（春日若宮祭）までに終えることを目安としていた。昭和25年（1950）頃、村共有の動力による籾摺機が入ったが、それも、全戸が12月10日までにこの作業が終えられるよう日程を組んだものである。

さて、この季節の楽しみとしてドヤモチやコゴメモチが作られたのは、土臼による籾摺りが行われていた時代のこと、コンバインでは小米やミオサ（籾が残った小さな穂先のこと）は、雑物として除かれてしまうからである。

唐箕と千石・万石どおしでの選別では、米は以下に分けられる。

上米は供出用、残れば販売する。自家用は中米以下であって、これを使ってドヤモチやコゴメモチを作る。



○ドヤモチ モチ米とウル（粳米）を一緒に米洗いし、蒸して臼で搗いたものである。ウルは中米を用いた。家の好みなどによって割合が違うが、5：5からモチ7：ウル3ぐらいまで。（昔は、一臼3升が基本）。ウルの割合が多いとどうしても固くなるため、年寄りなどはモチ米が多いものを好む。形は丸めて小餅にすることもあるし、またネコ（大ぶりのかまぼこ状にまとめたもので後で切って食べる）にすることもある。ネコにするというのは、ドヤモチは糯米の餅より固くなりやすいので、大ぶりにま

とめておけば、表面は固くなくても中は比較的固くなりにくいこと、また、餅はしばらくおくとどうしても黴がきてしまうが、ネコにしておくと、食べる時黴を除きやすい、などの理由があるという。

○コゴメモチ コゴメ（小米）とは、冷夏の影響や台風で稲が倒れた場合などにできやすい実が未熟な米（青い色なので青米などということもある）、白ひきでできた割れ米のこと。コゴメモチは、糯米1：中米の下7：コゴメ2くらいの割合でついた餅である。

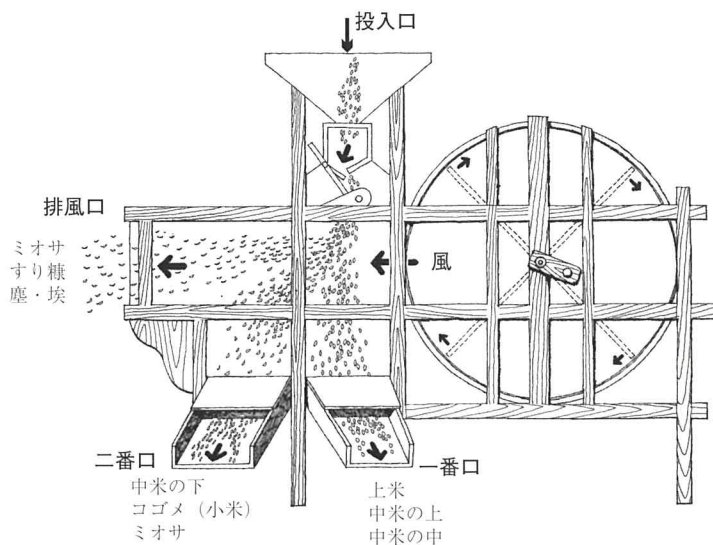
ドヤモチやコゴメモチは、間食にも食べたが、焼いて茶粥の中に入れて食べると茶粥だけのときに比べて腹持ちがよい。

また、コゴメは大阪方面へ運ばれ、アワオコシの原料ともなった。近隣にこれを取り次ぎ、コゴメを買い集める女衆がいて、即金で引き取ってくれた。

なお、アワオコシのことを、この辺りではアラレとかアラレモチともよぶ。

ミオサは、カラウス（唐臼）で搗いて牛の飼料として麦に混ぜてやった。コゴメやミオサを精米できるのは、カラウスだからで、精米機が使われるようになってからは、コゴメやミオサはクズとして除くしかなかった。カラウスつきは、登校する前の子供の仕事と決まっていた。

戦中、戦後の食料不足のときに、学校から「オチホヒロイ」「タニシトリ」に行ったことが、収穫期の思い出として残る。ハサカケや、イネコキのときぬけおちた落ち穂を拾う。また、稲刈りのすんだ後の田に潜っているタニシをとり、食料の足しにする他、穀から身を取り出してカラウスでついたものは、竹藪の第一の肥料となつたし、貝殻も干していただき、鶏の飼料とした。



唐箕の構造



# 民俗公園だより

大和民俗公園のあらまし

川瀬 浩



過去の「博物館だより」には、大和民俗公園の成り立ちや現状等が記されていないので、ここで改めてまとめておこう。

## 【沿革】

昭和21年から45年までであった県立経営伝習農場跡地に公園整備工事が始まったのは、博物館建設と同時期の昭和48年11月のことであった。

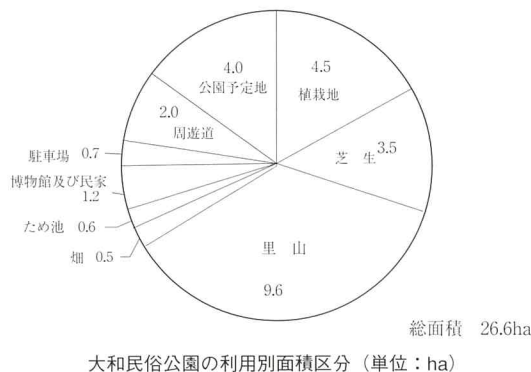
最初は公園と称していたものの、法的には博物館に付属する庭園的な取り扱いであった。それが、昭和50年12月に20haの面積をもって、「都市計画法」に基づく都市公園の計画決定がなされ、ここに「都市公園法」の適用を受ける公園となった。これにより、たとえば県民一人当たりの公園面積の算入対象になるとともに、公園内に建築できる建物の様々な制限を受ける等の法的制約が生じることとなった。ちなみに当公園は園内に民家を移築復原するという文化財を供する要素を伴うものの、法的には総合公園として扱われている。

昭和60年4月に20haの内の15haが正式に開園された。その後、昭和62年8月に現在公園予定地となっている区域6.6haが新たに公園に編入され、計26.6haが公園の計画面積となった。

平成に入って、平成7年度に里山部分の整備事業の着手がなされ、それにより、平成10年4月に1.0ha、平成13年3月に1.2ha、平成14年9月に5.4haの公園整備が完了し、現時点では合計22.6haが正式な開園面積となっている。

## 【公園の現状】

現在の公園の利用別面積区分を下表にかかげた。当公園の大きな特徴は、「大和民俗公園」の名称でもわか



るように、博物館及び移築民家が公園の中心施設であり、かなりの面積を占めていることである。博物館の建築面積が2,700平方メートル、移築民家が15棟で計8,900平方メートル(民家庭園含む)、合計1.2haにも及ぶ。

また、公園の4割にも及ぶ里山地区の大きさも当公園の特徴である。基本的には矢田丘陵を構成している二次林のクヌギ・コナラの林層を残して、下刈等で下層林木の整理は行っているものの出来るだけ自然に近い状態にし、管理費の削減を図っている。

季節的に民俗公園がにぎわうのは、2月下旬からの梅の開花時期、4月のサクラの開花時期、そして6月上中旬の花ショウブの開花時期である。

梅林は面積4,000平方メートルで紅梅、白梅、緋梅合わせて約130本植えられており、民俗公園に早春のにぎわいをもたらす。ここで特徴的なのは管理の面である。梅の木ファミリーというボランティア活動で100組の家族に梅園の草刈活動を年に5回していただいている。これが管理費用の軽減におおいに役立っている。

花菖蒲園は面積3,300平方メートル(植付け面積は1,200平方メートル)と小ぶりながら、花ショウブは66種類1万3千株と充実しており、毎年、計画的に土の入れ替え等を行うことで、開花時期には見事な花が咲き、来園者に喜んでいただいている。



ボランティア「梅の木ファミリー」による草刈作業

## 奈良県立民俗博物館

開館時間：午前9時～午後5時(入館受付は午後4時30分まで)

※民俗公園内の民家集落は午後4時まで

休館日：月曜日(休日にあたる場合は翌日に振替)

年末年始(12月28日～1月4日)

観覧料：大人200円 大・高生150円 中・小生70円

※20名以上、団体割引あり

※65才以上、身障者と付添1名は無料

交通案内：近鉄郡山駅→奈良交通バス①のりば→「矢田東山」下車  
→北へ徒歩7分/公園・博物館利用者専用駐車場あり

奈良県立民俗博物館だより Vol.33 NO.1 (通巻97号)

2006(平成18)年11月10日発行

編集発行 奈良県立民俗博物館

〒639-1058 大和郡山市矢田町545番地

TEL 0743-53-3171 / FAX 0743-53-3173

印刷 共同精版印刷株式会社

〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6